

倪濬七都集

月羅野

六

911.3
八
6



荒野集卷之六

雜

年中行夏内十二句

供屠藕白散

荷

いしげをたるとくあきゆの人比身

春日祭

とくもくもくたのなげはは

石清水臨時祭



香膏もきくふんがきつむいひ

灌佛

まゆあひやうふんはあはれ

端午

おもひくさくまふくはあはれ

施米

うらめしやうとてあはれ

煮酒

この葉もくさく七ク草

駒迎

瓜友も旅のすまじやう

撰虫

この葉もくさくおはれ

十月更衣

まじくさあはれ

五節

舞姫に來りし指を打つる

追儼

木を舐めしや腸よとらるる鬼お能

詩題十六句

野木

今日不知誰計會

春風春水一時來

氷を流し流る流るはまの風

白片落梅浮胸水

春來無伴雨遊歩

春來無伴雨遊歩

花賣ふるたのあらし隣り

花下忘歸因美景

寂寥

留春春不留春歸人

寂寞

ゆきをこぼれ入るの野もれ

巖風吹袂衣

不寒復不熱

徐脫色松うばすくひくはる

池晚蓮芳謝

蓮のまもりあきさるるまもり

暑月負家何処有客

來唯贈北窓風

涼をとりてかぬとよなり水のよも

大底四時心總苦就中斷腸是秋

芳の露そ純くもわが秋の元

夜來風雨後秋氣颯然新

秋のあそび終つて凡そあそびもなし

遲々鐘漏初夜長

耿耿星河欲曙天

あそびのまもりあそびのまもりあそびのまもり

殘照燈前墻斜光月穿牖

猶憶秋風吹白草

萬物秋霜能壞色

白頭夜禮佛名經

十月江南天氣好

可憐冬景似春花

寂寂深村夜

殘雪雪中

獨坐

白頭夜禮佛名經

佛身之禮之腰懷之白髮亦

後所好權以之

之

錯錯目立

舟泉

かきつゝの以月

付本実

五月園の鶯をよめる人の歌

釣瓶縄打

かへるはちやほのこころとふれはの里

糊賣

あふらぬのこころをいひしる

馬糞橙

こがししの松をよめる

ついで

李夫人

越人

槐在何許香煙引到焚處

かけぬきの抱はきこころの

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺花

冠不整下堂

ささる風と草由るる花白から

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛

點眉々細長外人不見之應笑

ものあはれやしののきの終
あはれん

西施

官中拾得娥眉芥不獻吾

君是愛君

花のよき花のよき牡丹の影

玉昭君

玉貌風沙勝畫圖

花のよき花のよき柳の影

一目留主

知

釣雪

疾也の故也は佛供養火く

辰

杜若生ん繪書結末るは

己

漢釋乃腋

午

乃而ひと

未

蟬乃喜之武家終夕食之

申

五月而也籍

一十

是

山

廉

野鳥

野

星虫

枝あり虫あり

海魚

おぬしを釣引きと盆の月 全

川魚

秋の昏鴨川くの火ぬきと 合帖

牛馬四足是謂天落馬首穿午

鼻是謂人

一古ろ梅はく桃結継ある那 越人

舟於壑藏山於隱

周然而夜半有々力者履

之而走

舟の走の市にうらむとい

絶聖棄知大盜乃止

七夕をわつすことなるとい

鏡者久

そぬらく流るるものちをちか

桂夕

鈍者壽

錦山乃

...

...

師直

...

一休

...

法然

...

山岩

...

海岩

...

曠野集卷之七

名所



つぎのつすみ奥のこ見は竜回水 杜園

一 奥の骨や或る大江山 荷今

か 橋乃松と地と 朧さく 芭蕉

其 第一把うさく 切えさの彼 湍水

嵯峨 ぼくをえさのあゆぬ 荷今

琵琶橋眺望

やう残る鬼嶽とむまゆらむらむら

合帖

國うらむらむらむらむらむらむらむら

宗祇
唐

美濃國國うらむらむらむらむらむら

あむらむらむらむらむらむらむらむら

あむらむらむらむらむらむらむらむら

杜因

あむらむらむらむらむらむらむらむら

重五

五月あむらむらむらむらむらむらむら

芭蕉

湖乃あむらむらむらむらむらむらむら

去来

牛もあむらむらむらむらむらむらむら 一髪

角回川

あむらむらむらむらむらむらむらむら

貞室

あむらむらむらむらむらむらむらむら

破笠

あむらむらむらむらむらむらむらむら

芭蕉

あむらむらむらむらむらむらむらむら

越人

九月十三日

あむらむらむらむらむらむらむらむら 素堂

鴨のさかやうなるをさうじとよむ相国也 胡及

鴨のさかやうなるをさうじとよむ相国也 剛支

武蔵院 舟泉

湖をゆるひらうとくさん村に飛 尚白

かき橋やさうとあをせきく印 随友

むらりのせねあへともみの母 洗悪

せうしと生海流を橋や水の奥 俊似

みと川の宿輪橋せとのくなく 一笑

雪が富士をまを二川にからけり 湍水

とー形山も唯大雪が夕小 野水

星崎のやまをえとや鳴かき 芭蕉

海子のやまを破の小あが棋をひ 如行

旅

雲雀とく上くやまうみ流の那 芭蕉

大和山平尾村のく

夜の隈信は知てる旅ぬり那 全

楊吹里を眩しく通る夕机

日の入や舟をえくひ樵の心 一髪

のさくや湊の音はせさうな 荷弓

半川脱と後をたひぬ衣を 芭蕉

あまの人の後別を

かきく吹あまのなをく笑や 除凡

疾くぬく食糲の何や 冬松

髪をさすうらにあめを 昌碧

五月雨を柱目をあす市松家 松芳

夕らにとの天名う一志は 傘下

芭蕉ちよとて

稲妻あにさくまつきをさうり那 釣雪

なをくく後くす心秋の蟬 一井

あま風をくくわの舟は 野水

おのくくく様のうあま 舟泉

き方を沖くすくく松をくく 嵐弾

はらしなまらんてむらへ

又級乃月ちこ一人こらを秋乃 荷兮

越人旅をたふしきてあかた

夢

月入り脇へつきて馬乃うへ 野水

たつて池川たよりつきて本堂 芭蕉

秋

撫乃首あはれは教り秋のふ 路通

将形梅とらお其角はくちま

たつてあはれ

将形桶に麻をかつて秋の山 荷兮

とあつて 穂もを新し 京 ちひ

八月とらあはれしりごまわ 去寮

能をけし 観あつてお徳っ那 一升

石川まきこくも

澤庵乃墓をりの秋の書 文鱗

草枕たふきあつてあまの夢 芭蕉

藻あつて刀さつてや村り他 常夫

伴出

芭蕉のこゝろ

くさくさな水もさびしき山もさびしき

さびしき山もさびしき水もさびしき

其角のこゝろ

あはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれも

あはれもあはれもあはれもあはれも

越人のこゝろ

こゝろのこゝろ

こゝろのこゝろ

迷懐

舟のこゝろ

こゝろのこゝろ

こゝろのこゝろ

こゝろのこゝろ

高野

あまのたまはるる真の代

松岡

あまのたまはるる食は

梅吉

高野

あまのたまはるる——

雛の色

芭蕉

あまのたまはるるのついでに

荷号

あまのたまはるるひびり一袋

同

あまのたまはるるはるるの

杏雨

あまのたまはるるはるる

松岡

あまのたまはるるはるる

亀洞

九月十日まふまふの

あまのたまはるるはるるの仲はるる

菊

嵐雪

あまのたまはるるはるるの仲はるる

脱履

あまのたまはるるはるる

あまのたまはるるはるる

芭蕉

四里の人こまけりてあ

二つ一の... 杜國

鎌倉建長寺よまて

... 越人

あまの... 越人

あまの... 越人

あまの... 越人

あまの... 越人

あまの... 越人

櫛の穴... 去來

月也遠... 西武

物... 芭蕉

はあ... 除風

老... 伊勢

以年也... 越人

意

車... 一有妻

まぬくや余のよんりてはる

除風

蚊をむくはるのちよひてはる

長虹

むーたり月とを花ぬてはる

丈潤

虫に小神をてはる女と那

冬文

きいびの妹と垣はらう甚なり

心棘

六宮粉黛無顔色

手月園の稲妻の雨あや月の夜

長虹

一巻くはる人侍のあはをとりり那

尚白

まひーまおよ

つまめしとあさやと仲一をあむ

尚今

まらあのうらなまはるつまとの家

小春

妻のまみあはるこくはるはるは

越人

松の申時争う歳のくまかりか

俊似

おおもひ火燈をぬくはるむ

舟泉

うらぬく大持はるこくはるは

嵐蕨

山畑りものうらや華う引

松芳

三ぬ〜 冬松

ねら〜 昌浩

〜 樂常

〜 未期

〜 守武

〜 守武

〜 傘下

未期



菊世和堂きくよ 七頃

松坂の浮羅とらふ人のまきり

〜

橘乃く〜 荷今

〜

〜 京 去來

〜

〜 荷今

Handwritten cursive script

木乃目相の *Handwritten cursive script*

辞也

Handwritten cursive script

Handwritten cursive script

何 *Handwritten cursive script*

一原野 *Handwritten cursive script*

Handwritten cursive script

釣雪

妻の遊書

Handwritten cursive script

Handwritten cursive script

来 *Handwritten cursive script*

二 *Handwritten cursive script*

Handwritten cursive script

其角

Handwritten cursive script

松風子や智り合はくふ秋の香 尚白

あはれ人の遠善く人の心

煙火をさゆやあふこの意をも 芭蕉

落よてみまうりまはるを

あはれおそろやうせうらふ湖なり 嵐弾

多由の野くさやまの伴のそは 比留貝 山春

あはれおそろやうせうらふ湖なり

あはれおそろやうせうらふ湖なり

曠野集卷之八

釋教

伊勢まゝ

神垣のねあはれかうのいり煙盤像 芭蕉

負うるまゝあはれは ちのねんを 嵐弾

西行上人五百歳まゝ

あはれおそろやうせうらふ湖なり 荷守

あはれおそろやうせうらふ湖なり

連翹也そと目せ志は成りり 胡及

うく青く竹の葉くは二玉川 松茸

木履くく傍りきり雨乃花 在四

片はくしゆとてぬて鼓く花のち 冬松

花の傍りやも飽ん揚さこのち 其角

貞享つら此の度は全月東照宮の別當

僧正の此方に意馬入師近座執事法華

八講の傍りしきとては徳園はまよりく

序品のころんや

散るたのころんや 根入

女房の徳子とてはく山藁とてはく徳園とては

わと龍女成佛の成りてまのいあま

白泉かむ音のころんや

ほろくともあまのころんや 同

観音の屋上のころんや 俊似

古寺のころんや 一井

八雲のころんや

海を渡るころんや 千園

伊豫

咲ききりあまのころんや 一井

復山の本座のころんや 葦葉

奈らるる

薩佛乃月くをゆまふ床の子か 芭蕉

薩佛のそ此法——ちりかき 尚白

ちりかき

腰のあはれをり終り山か 一雪

亦く来て蒼一日の清みか 一笑

加賀

十如是

松あつとあつゆ〜海る 荷子

昂身昂佛

復隠乃きる疾とわんの佛か 愚益

ほろひや後の縁たると夜 崩彦

ねろろや内もくあろく施餓鬼棚 荷子

おろろおろと〜のふら 標丸

石籠く隠縁鬼の棚のくつまや 文里

魂糸舟と〜酒をもも向きり 亀洞

たもあつと送ふ〜あ〜なせると 卜枝

松乃隈 釣雪

平ホ施一切

橋待こもく 舟人 舟をさし 後似

綿妻より 大佛 杖をひき 荷子

垣越より 導 敵くもや 上枝

あつ人四時の景柳なりとて水鏡也

燕とと不食不園をいを感し

系と及ととく

乃くこぬら 伴くたつハぬる 荷子

あつちの真り

燕の法寺乃 鼓くアして 其角

進くあつち 垣まわし 月舟 一井

舟の子と本御 舟をさし 舟作 十枝

人のわらんあつち

あつち

衣さつち 舟より 一時雨 嵐彈

鎌倉の西園論

たつちの舟や 直く水さつち 越人

古寺のそと

暎や伽藍の雪見也ひ 荷今

同

雪ややうと一玉もろ斤腕 後似

つらきもくこハされもき割仏 一井

新築する人のこハや和舟鼓 文陶

千觀の馬もかせりしゆのそ地 其角

薬王品七句

如寒者得火

おの白くむきの暖くらきあはれ 胡及

如裸者得衣

雪乃月也ほ楊指ふあまは家

如商人得主

双六乃あひてふひとむつていふ

如子得母

竹まきくをけくぬつくとけぬ

如後得船

月比比隣の板本

如病得醫

かきくわさしはまのこ付あしあ

如暗得燈

秋のよおねいしゆとさしにたさ

神祇

古もや名あつらうる獅子頭

釣雪

二月廿五日

たさうきや女四日の月比梅

荷今

きんくと梅あひこころ

同

さうともあひこころ神の梅

亀洞

上下のさうとぬやうと津の梅

昌碧

灯のかすのなちまの梅の中

釣雪

何れもくわのやそをくわく梅のむ 越人

是くわくあつあつとつとつ梅の身泉

月代もきくちや梅の身 雨桐

所あつて梅の瑞籬たふり 重五

袴馬くわ人の後ささめくわ 去案

名くわく歯袋かきくわ 鈍可

言乃後川後ささめくわ 李桃

此も彼の本は梨の中の梅は 好葉

ほくくわくの中をくわく 玄宗

まきくわくをくわく 亀洞

破扇つまくあつ後うめ 未学

川系さく瘡まきくわく 荷今

こかりしや里は子観く神輿初登 尚白

此月能高比頃くころよあつ 松芳

まきくわく祢直のさきくわく 落格

若宮奉納

まこととてあまのまはせ神々不
利重

跡の方也ら疾もやらず雲の跡
野水

終麻川若明の跡も神示
昌碧

かすみの神もさふもな庭火
村侯

橋杭や木枝うも煤もひ
十枝

祝

肩付らいつくさくなめ地を馬
冬文

荷字の四十乃りま

炎毒も竹を危いことゆ
重五

君う代やとうくこと玉つ
越文

青苔も何處もさけ印の石
傘下

いさゝか酒もみまに枝は
亀洞

あ代の秋にあひくさ
同

きくかか神あり

先程へ柳身らのうら
芭蕉

Handwritten text in a cursive script, likely a letter or document, written on aged paper. The text is arranged in several lines, though the characters are difficult to decipher due to the script and fading.



